

# 詩とことば

阿部 公彦

2017.7.11 P.13

定の 筆致 女性 羽野 で植 幼 ン 品

く心に 律文

満足度



作品計約30点を後3時からギャが行われる。入合わせは、同店・4111)。

留学生が多い授業で、俳句を作らせたことがある。季語を教え、あとは五七五のリズム。そこそこ形はできると、ただ、その先で微妙な違いが出た。たとえば「小川には／笑顔の子供／楽しそう」と「桜散り／舞う花弁が／風になる」。どちらも日常風景だが、おそらく後者に「俳句らしさ」を感じる人が多いだろう。多少なりと日常の見え方をずらしている。

詩の特質は散文＝日常性に対しての「非日常性」と言われる。もちろん、日常があつてこそその非日常。現代詩も日常のいく近くで、そこからこぼれたり、陰に見えたりする異物をとらえてきた。小笠原眞『父の配慮』（ふらんす堂）に描かれるのは耳鼻科医の職務風景。青年の鼻から腫瘍をひっぱり出す。「ソウツと腫瘍を挟み／ゆっくりと動かすと／果たせるかな／コトリと／まるで偶然知恵の輪が外れたように／腫瘍が铸型から外れて」（「天を仰ぐ」）。身を乗り出しつつものめり込まない。日常性と小さな驚きが拮抗す

## 日常からの異物とらえる

る。詩人の目だ。岩成達也『風の痕跡』（書肆山田）は風景を見やるやさしい目線に、この世ならぬ気配が漂う。「いまでは海は彼方へと退いて／こころはまったくみえない／そのかわり後背部の低い山並みがその記憶の辺りでもあるかのように 灰緑色の稜線を薄くうかべている。そのうなだ この石切場は低く囲まれていて「出口がない」（「眺め」）。

貞久秀紀『具現』（思潮社）も穏やかな目線の作品だが、語りは流動的で静謐な風景を切り崩す。「お山とよばれて／牛の背のように尾根をもつ雑木林の／ゆるやかな坂をなすふもとの道ぞいにこの溝がつらなり／かたわらにひとりの来たわたしが／歌いはじめれば声もそこにきこえているように／きのうの雨が山からの清水となって／溝の底をあかるく／流れていることを知らせているところだ」（「あかるい陰で」）。静か動か。時間の流れが独特な詩集である。

川田絢音は短いスペースに、にわかな緊張感を作るのがうまい。その『白夜』（書肆子午線）と、純度の高い言葉を次々に屈折させる新鋭広田修の『vary』（思潮社）には、ともに硬質な凝縮性を感じた。（東大准教授）

## 「作家に展示会の主導権を」

インドの写真家 都内で「移動式」の美術館

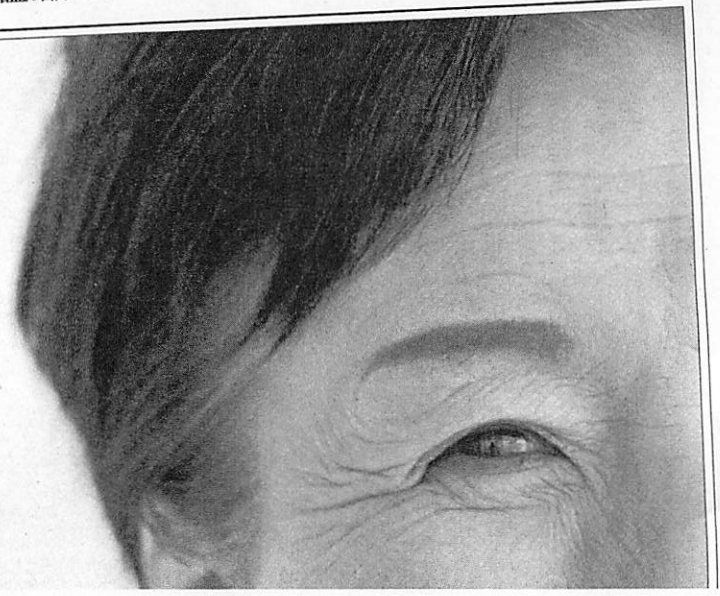
今の美術館の在り方に揺さぶりをかける展示会が、東京・恵比寿の都写真美術館で開かれている。数々の国際展に招かれるなど活躍が著しいインドの写真家、アヌ・サハニの個展「移動式」の美術館」中産階級の人々を被写体に、ジエンダーや格差など現代インドの問題を取り上げてきた。会場中央に置かれているのは、たくさんの写真がはめ込まれた屏風のようなもの。彼女

蒸れて痛がゆい

大人の尿かぶれ 治療薬

吸水パッド  
紙パンツ  
尿など  
によるデリケート部位のかぶれ

デリケート部位のかぶれ、皮膚炎に



りなど